

## 白内障 Cataract

白内障とは眼の奥にあってレンズの役目をする水晶体と呼ばれる部分が白く濁るためにこのような名称になりました。比較的犬ではこの病気が他の動物に比べて多く見られる傾向にあるようです。猫では稀な病気です。

一般的に白内障は老齢性の変化と思われがちですが、生まれながらにして起こっているものや若年性で起こるものもありますので注意してください。犬の場合7歳を過ぎたころから老齢性の白内障が増えて行きます。

### 原因

白内障の原因には様々なものがあります。遺伝性、糖尿病などによる代謝性、栄養性、中毒性などがその主なものです。特に成長期の仔犬に粗悪な餌を給仕し続けることによる栄養性白内障には注意してください。

### 症状

水晶体の白濁が主なものです。白濁は通常進行性でその白濁の程度により、視力障害が進みます。完全に白濁してしまうとまったく見えなくなってしまうます。

飼育者は、暗くなると動きたがらない。段差でつまづく。ものにぶつかる。壁伝いに歩きたがるなどから異常に気づくようです。ほとんど見えなくなると、急に手を出した時に噛まれることもありますから注意が必要です。

### 診断法

白内障かどうかはあるていど視診で判断できます。しかしながら詳しい検査には検眼鏡などを用いたり、各種眼科検査、超音波検査などを行います。

特に両目が急速に白内障になった場合は、糖尿病など全身性の代謝疾患を疑って血液検査をおこなうべきでしょう。

また、外科的手術を行うのであれば網膜電位図検査を行うこともあります。

### 治療法

白内障の治療は、外科的療法と内科的療法に分けられますが、このうち内科的療法で白内障を治すことはできず、その進行スピードを抑えるために内服薬や点眼薬が用いられます。但し内科的治療法は効果がないかも知れないという報告もあります。

外科的療法には様々なものがあります。水晶体を摘出したり、特殊な超音波機材を用いて吸引したりすることが多いものです。いずれにせよ、外科的療法は一般の病院で行うのではなく、専門的な知識と技術を備えた獣医師や大学病院のレベルと

なりますので、外科的療法を希望される場合は主治医の先生と十分に相談する必要があります。

糖尿病性白内障は糖尿病の治療が当然必要になります。初期の糖尿病性白内障であれば回復の見込みもあります。

### 自宅での看護法

処方された薬剤はきちんと用いましょう。また、点眼薬は1回に大量に用いるのではなく1回は1滴でいいですから、1日の回数を増やしてあげたほうが効果的です。

動物は自分が眼の疾患にかかっていることが解りません。このため、自分の前足でひっかいたりして新たに角膜などに損傷を与えることがあります。点眼のたびに眼に傷や新たな異常がないか注意して観察するようにしましょう。

### 予防法

基本的にはありませんが、発育期の栄養性白内障に関しては、きちんとしたペットフードの給仕がその予防になるでしょう。また、糖尿病性白内障は定期的な血液検査を含む健康診断を行えば早期に発見でき、対処の幅が広がるかもしれません。

眼は大切な器官です。異常を感じたら早期に獣医師の診察を受けましょう。

### メモ

プードル、コッカー・スパニエル、シベリアン・ハスキー、ゴールデン・レトリバー、ビーグル、ミニチュア・シュナウザーなどが発症しやすい傾向にありますので特に日頃からよく眼を観察して、眼の疾患に注意してあげてください。そして、異常を感じたらすみやかに主治医の診察を受けましょう。

眼の病気で重度の角膜炎の場合に同じように水晶体より前方にある角膜が白くなることがあります。これを白内障と勘違いしている飼育者の方がいらっしゃいますので、どちらにせよ異常を感じたら獣医師の診察を受けましょう。

#### アニコム損保 ペットの医療保険無料資料請求

<資料請求コード>

**0010-0000-0000** 資料請求の際は  
このコードが必要です。

あんしんサービスセンター

**0800-888-8256**

携帯電話/PHSからは

**03-6810-2314**

どうぶつの  
病気・ケガに対し  
**診療費の50%を**  
お支払いします。

**www.anicom-sompo.co.jp/req/**